

大学へ入ってからでも

伸びる子を育てよう

教育トーク

大学へ入ってから伸びる子とは

本コーナーでは、大学や社会で活躍されている方々に「教育とはどうあるべきか」についてお話をいただきます。

池坊 松本先生は理系でいらっしゃると思いますが、先生にとって漢字とはどのようなものですか。

松本 漢字は日本人にとっての教養、文化的な素養として、理系・文系にかかわらず大切なものだと思います。明治時代を振り返っても、森鷗外は医者でありながら文人として活躍していましたし、幕末の蘭学者たちも漢文や漢字には深い見識を持っていました。西洋でもギリシャ時代以来、たとえばレオナルド・ダ・ヴィンチが芸術だけでなく科学や技術にも秀でていたように、歴史上名前の残っているような文化人は、自然科学にも文学にも精通していたようです。

池坊 確かに、活躍されている科学者には芸術に造詣の深い方が多いですね。

しません。私たちのころも大学受験にあたって理系・文系を選択しましたが、今はもっと早い段階で子どもたちにコースを選択させている高校も多いようです。また、大学の研究も狭い分野に絞られて、よそ見ができなくなっています。これでは人を育てるという点でバランスを欠いているといえるでしょう。昔は、僧侶も星を見て、宇宙や自然への想像を巡らせていたのですが。

池坊 才能を開花させるためには、広い視野を持つことが必要ですね。ところで、今の学生は、文系であっても「十分な語彙力が身につけていない」と聞きますが、どうでしょうか。

松本 最近直接学生を教えるはいるので少し前の話になりますが、研究室へ入ってくる学生に要領のいい子が年々増えていると感じています。たとえば、字を書くのは早いが雑なのです。知識も同様で、流行のことは知っていても、社会生活の中で自然に身につくはずのものが欠けている。時間をかけてじっくり物事に取り組む機会が減っているのです。

池坊 今は受験勉強に集中し、じっくり音楽を聴いたり、本を読んだりする時間のない中学生や高校生も多いでしょうね。

松本 もちろん、幅広い知見を持った学生もいます。しかし、受験のために無理を重ねて、自分の能力いっぱいはいっぱい



松本先生のために母親が作ってくれた手作り絵本①



財団法人 日本漢字能力検定協会 理事長 **池坊 保子** × 京都大学 総長 **松本 紘** 先生

1942年東京都生まれ。学習院大学文学部在学中に、華道池坊45代目家元・専永氏と結婚。生け花の育成発展に尽力するとともに、執筆、評論、講演活動で活躍。1996年に衆議院議員に初当選し、現在5期目。主に教育分野で活動し、文部科学副大臣などを務める。2010年4月より現職。

1942年奈良県生まれ。1965年京都大学工学部電子工学科卒業。1967年同大学院工学研究科(電子工学専攻)修士課程修了。京都大学宇宙電波科学センター長、同大学生存圏研究所長、同大学理事・副学長などを経て、2008年10月より現職。専門分野は宇宙プラズマ物理学、宇宙電波工学、宇宙エネルギー工学など。

むため、苦には感じないらしく、はつらつとしていました。たとえば多少は強制的な面があるにしても、子どもたちに集中する経験をさせることによって、それまで見えなかった新しい面が引き出されると思います。

松本 同感です。一人ひとりが課題を与えられてそれをクリアするためにトレーニングを繰り返すことはとても大切なことです。ところが大人になると、「自慢になってはいけない」という奥ゆかしさもあってか、苦労話を語ろうとしません。それどころか、「あまり勉強はしてこなかった」などと謙遜されることも多いようです。これは非常に残念な傾向で、大人は子どもたちに自らの苦労話をもっと伝え、自ら手本になってほしいと思います。

子どものころを振り返って

池坊 先生ご自身はどのような家庭でお育ちになって、どのような子ども時代を過ごされたのですか。

松本 私たちの時代としてはごく一般的な貧しい家庭で育ちました。勉強は真面目にして、小学校時代は満点を取るのが当たり前で、友達もみなそう考えていると信じていました。祖母と母親がとても教育熱心で、母は絵本を買えなくても友達のお母さんから借りてきたものをきれいに写してくれて、私はそれを毎日のように

で大学へ入り、入学後に余力が残っていない学生が増えたような気がします。

池坊 若いうちに力が伸び切ってしまうのは、人類、社会への貢献はできませんね。

松本 こんなことを考えると、やはり受験勉強の功罪は大きいように思います。ですから私は、大学へ入ってから伸びる子ども、余裕のある子どもを育てるためには、小さいうちから、将来あらゆることに対応できるように頭脳のトレーニングをすべきであると言っています。最近は何事も脳科学を使って説明することが多くなりましたが、それにならえば、前頭葉、側頭葉、言語野などの各領域を満遍なく鍛えておくということになるでしょう。

池坊 今は胎教に始まって、0歳から早期教育を受けさせている親御さん多いらしいです。私は絵本の読み聞かせ

や、自然に音楽に触れることの方が、小さい時から知育に偏重することより有効だと思いますが、どのようにお考えでしょうか。

松本 動物でもそうですが、発達段階に応じてすべきことがあると思います。「三つ子の魂百まで」ということわざがあるように、3歳までは情操教育に力を入れる、幼稚園や小学校の低学年では記憶力を高めるための訓練をする、といった具合です。

池坊 現在、モジュール授業を小学校低学年から取り入れている学校も多いのですが、私はこれに賛成です。音読や計算に15分間、集中して取り組ませる。それにより、内在している能力を引き出すことができ、子どもたちがとてもいきいきとして勉強に励みます。最初は強制されることの弊害が起きないか心配しましたが、子どもたちはみんなで一斉に取り組

読みました（写真・ページ下）。祖母からは物を大切にすること、学校はどのようなことがあっても休まないこと、それこそ「もったいない」と「みつともない」を徹底的に教え込まれました。といって、理想的な家庭だったというわけではありません。家の中がいつも平和だったわけではなく、ご多分にもれずけんかや人間関係にまつわるいざこざもあつて、まさに社会の縮図そのものでした。

池坊 よく「家庭教育が大事だ」といわれますが、反面教師ということがありますから、家庭はある意味で自然、あるがまま。しかし十二分な愛情を子どもたちにも注ぐことこそ大切なのですね。



松本 おっしゃる通りですね。

池坊 今の子どもたちの置かれている状況は、親や先生への畏敬の念を持ちにくくしています。これは子どもたちにとってきわめて不幸なことだと私は考えています。親や先生に限らず、自然に対してもよいのですが、何かに畏敬の念を持つことが子どもたちの教育にとっては欠かせないのではないのでしょうか。今は情報があふれていて、すぐに情報を比較することができるので、絶対的なものが減って畏敬の対象がなくなってしまったのかもしれない。やはり親や先生に尊敬と愛情を抱いている子どもたちの方が人間として幸せだと思いますね。

松本 それに、今は社会全体として「個性を伸ばそう」という方向なので、子どもたちはあまりきつく叱られていません。反対に「よくできた」と褒められた経験も少ないのではないのでしょうか。

池坊 当協会では、この秋から「満点賞」を新設しました。現在は3歳から100歳までの方が漢検を受検してくださっていますが、子どもも大人も、やはり褒められるとうれしいものですね。

漢字文化圏、漢字の広がりについて

池坊 私どもは漢字に関する研究を京都大学の先生方と協力して進めていきたいと思います。まず漢字シンポジウム

ある文字、それが漢字なのです。

社会で子どもを育てよう

池坊 今は情報があふれ、各家庭の生活水準も上がって、子どもは何でも与えられています。1冊の本を何度も繰り返し読むということもなくなりましたね。創意工夫する喜びを経験する機会が少なくなりました。

松本 家庭教育は大事ですが、子どもは親や家族だけでなく、地域の人からも影響を受けます。社会科学に「場」を重んじる文化と「資格」を重んじる文化があるとすると、それによるとアジアや日本は、伝統的に「場」を重んじる文化であるとされています。たとえば、私が自己紹介する場合は、「場」を重視する「京都大学の松本」であり、「資格」を重視する「科学者の松本」であり、地域といった「場」の持つ力がどんどん失われてきており、しかもその傾向は止められませんので、社会全体で子どもを育てるといふ視点からの新しい仕組みを考えなくてはなりません。

そこで私は、漢検のような社会組織の役割がとても大事になってくるのではないかと考えています。しかも漢検を単なるシステム、媒体に終わらせるのではなく、漢字に興味を持って、その背景にある日本の文化や社会、政治、経済に関心

のようなからではないかがでしょうか？

松本 京都大学は言語や文字の研究者に恵まれています。私のように漢字の知識が乏しい者は、10万字あるといわれる漢字のうち30000字程度しか知りませんが、研究者はそれぞれの漢字が持つ歴史まで理解しています。

私なりに考えている漢字の面白さは、形は多少変えながらも、世界で最も古くから使われ続けてきた表意文字であるということ。他の表意文字が次々に消える中で漢字だけが残り、2、3000年もの間、アジア文化の底流に絶えることなく流れてきたのです。

池坊 中国では漢字が簡素化され、記号に近いものになりつつありますね。

松本 文字が時代や文化の変遷とともに変化することはやむを得ないと思いま

す。漢字についてのシンポジウムを通して、漢字の背後にある文化や哲学はもろんのこと、私のように科学に携わる者の目からは、漢字を通して宇宙観や天文、物理、さらに数量に対する考え方の違いを知ることができたらおもしろいと思います。

たとえば、漢字文化圏では、諸説はありますが、 10^{24} から 10^{88} までの数を表すことができます（『塵劫記・寛永11年版』の万進に統一された記述より）。西洋には小さい数を表すナノ（ 10^9 ）、ピコ（ 10^{12} ）、フェムト（ 10^{15} ）、アト（ 10^{18} ）、zepto（ 10^{21} ）、ヨクト（ 10^{24} ）などがあり、大きい数を表すのに、メガ（ 10^6 ）やギガ（ 10^9 ）、テラ（ 10^{12} ）、ペタ（ 10^{15} ）、エクサ（ 10^{18} ）、ゼタ（ 10^{21} ）、ヨタ（ 10^{24} ）などがあります。一方、漢字文化圏の表現は西洋の表現と比べますと、よりダイナミックなスケール観が



松本先生のために母親が作った手作り絵本②

を持つてもらったり、漢字の持つダイナミックなスケール観と柔軟性についても考えてもらったりする場にしてほしいと思います。

池坊 ありがとうございます。私は、文部科学省の副大臣時代には、学校支援地域本部事業に取り組みました。それ以来、従来の子ども、保護者、先生の関係だけでなく、祖父母や地域の人たちといった斜めの関係も含めて、いろいろな人間で教育の場を作ることが子どもの成長にとって欠かせないと考えてきました。

松本 「場」の対極にあるのが「資格」の概念で、西洋ではこちらを重んじる傾向が強いといわれます。これは「何々ができる」という資格がものをいう考え方です。現在の日本は、「場」が壊れつつある中で、まだ資格社会にもなっていない。私としては両方の良い面を考えて、できることから手をつけていかなければならないと思っていますが、そのためにも、漢検の果たす役割は大きいと思います。

池坊 ありがとうございます。日本人に

※1【モジュール授業】基礎・基本の習得を目的に、単位時間を10分、15分といった通常よりも短い授業単位（モジュール）に分けて反復学習を行う授業。スピード、テンポ、タイミングを重視することで集中力や思考力・理解力の向上などを図る。各モジュールは、音読や計算のほかに、英語や地理、音楽、パソコンといった教科横断的な組み合わせで行われることが多い。現在は、始業前や授業の一部で実験的に行われているが、カリキュラムの弾力化の流れを受けて、新しい学習指導要領では条件付きで正規の授業に組み込むことができるようになる。

※2【表意文字】1つの文字が一定の意味を持った文字（詳しくはP8～9の特集「漢字を楽しもう」を参照してください）。

※3【学校支援地域本部】学校・家庭・地域が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる体制を整えることを目標に、学校の教育活動を支援するために設置された。「地域コーディネーター」「学校支援ボランティア」「地域教育協議会」から構成される。

教員・保護者向けセミナー開催

漢字の魅力を再発見！

「ひとつづくり」は漢字が原点、みるみる漢字が好きになる！

第1部 漢字を楽しもう



京都大学 大学院 人間・環境学 教授 阿辻 哲次 先生

漢字の大きな特徴

漢字は空気と同じようなもので、私たちは日々、その存在をあまり意識しません。しかし、漢字は空気と異なり、なければ生きていけないものではありません。それでも、同じ空気を吸うのであれば「できるだけおいしい空気を吸いたい」と考えるように、漢字を使って同じ文化的活動を行うのであれば「より豊かな表現をしたい」と誰もが思うことでしょう。そこでまず、漢字の特徴に目を向けてみましょう。突然ですが、次の①～③から好きな字をそれぞれ1字選んでみてください。

- ①京 都 詩 夢 愛 美 香 花 馬
- 飯 酒 書 女 山

- ②ダ イ ガ ク ノ コ ウ ギ ハ
- ツ マ ラ ナ イ
- ③Q W E R T Y U I O
- P Z A C F

このような課題が与えられた場合、私たちは①についてはそれほど苦労せずに答えられますが、②や③では少し戸惑ってしまう。実はここに、漢字の第1の特徴があります。

漢字は「表意文字」と呼ばれ、文字そのものが意味を持ち、人それぞれの思いを1字に込めることができるのです。これに対し、ひらがなやカタカナ、アルファベットは「表音文字」と呼ばれ、それぞれの文字は単独で意味を持たないため、1字に思いを込めることができません。現在、世界中の日刊紙のうち、発行部数が100万部以上の新聞で使われている文字は、少なくとも28種類あるといわれていますが、その中で漢字だけが表意文字なのです。漢字の第2の特徴は、縦書きにも横書きにもできる点です。私たちはこのことを当たり前のよう感じているのですが、世界の言語の中では決して一般的ではありません。文字の書き向きを「書き方向」といいますが、英語は左から右へ、アラビア語は右から左へというように、多くの言語では書く方向が決まっています。確かに過去には、一見、奇抜に思われる書き方向をとっていた民族もありました。1980年代半ばに、エチオピアの山岳地域に住む少数民族の史跡では、下から上へと文字を書いた石碑が発見されています。また、それよりはるか以前のメソポタミア文明では、1行目は左から右へ、2行目は右から左へ、牛で田を耕すするように1行ごとに方向が変わる「牛耕式」という書き方をしていたようです。

もちろんこうした書き方向は例外であり、1つの言語には1つの書き方向しかないのが一般的です。しかし漢字は、上から下だけでなく、左から右へも書くことができますように、書き方向を自由に選択することができます。当然、漢字から派生したひらがなやカタカナもこの特徴を受け継いでいますので、やはり上下左右に書くことができ、書道やグラフィックデザインなどの芸術にとっても、大変都合の良い文字なのです。

漢字を使って多種多様な日本語表現を

「動物園にライオンがいる」という文は、ほとんどの人がこのように表記します。「動物園」という漢字は、小学校3年生までに学習しますので、大半の人が間違えずに書くことができますでしょう。万が一、漢字を忘れていても、多くの人は「漢字で書くべきである」と考えているはず。しかし、「晩ご飯は、たけのこ飯とほうれん草のおひたしです」という文では少し様子が変わってきます。この文をどのように書くか大学生に試してみたら、漢字、ひらがな、カタカナを交えた書き方が数十通りもありました。先ほどの表現が最も一般的な表記だとは思いますが、ここでポイントとなるのは、日本人なら、どのように書かれていても意味を取り違えることはほとんどないということです。

日本語が多様な表現を許容する言語であるのに対し、西洋には「正書法」という書き方があります。それは、1つの単語に複数の表現がある場合、それを1つに絞り込もうとするものです。西洋の言語学者や西洋の言語を研究する日本人研究者たちからは、「日本語は正書法がないことが欠陥だ」としばしば指摘されることがあります。しかし、果たしてそれは言語としての欠陥なのでしょうか。

私たち日本人は、感性によって文字を使い分け、自分を表現します。1つの文章について複数の書き方があることは、個々人の言語的感性が反映された結果であるといえることができます。それぞれの人が漢字、ひらがな、カタカナの複数の文字を使い分け、多種多様な表現をするからこそ、豊かな日本文化がつけられていくのです。すべての国民が画一的な表現をするようでは、日本文化は広がらない、底の浅いものになってしまうでしょう。

漢字について言えば、人間でいうところの呼吸のように日本語には欠くことのできないもの、ですから、肩の力を抜いて、フランクに付き合っていきたいものです。

第2部 漢字力・国語力向上のための「辞書引き学習法」のススメ



中部大学 現代教育学部 准教授 深谷 圭助 先生

さあ、辞書を用意しよう

小学生が辞書におびたらしい数の付箋を貼って勉強している姿をテレビや新聞でご覧になった方もいらっしゃるのではないのでしょうか。私が実践している辞書引き学習法とは、普段なじみの薄い国語辞典や漢字辞典を、小学校1年生から積極的に活用する、単なる辞書の引き方の指導を超えた、新しい国語の指導法です。具体的には、まず知っている言葉を辞書で引き、意味を確認したら付箋の上部に調べた言葉を、下部に通し番号を書きます。次にその付箋を文字が隠れないように調べたページに貼ります。これを繰り返すのが辞書引き学習法です。

辞書をいつも手元に

学校で子どもたちが言葉を学ぶ機会は、何も国語の授業だけではありません。算数や理科の授業でも、そして、休み時間や昼食時にも、言葉を学ぶ機会はたくさんあります。ですから、できるだけ自分用の辞書を用意させ、常に手の届く場所に置いて、興味を持った言葉があればその都度辞書を引かせるようにしましょう。

先生方も、辞書引き学習法を実践する際には、配当漢字に対して「習っている、習っていない」「ルビをふる、ふるわない」など、神経質になる必要はないと思います。辞書引き学習法では、子どもたちの「知りたい」と思ったその瞬間の興味を最大限尊重しますから、まだ習っていない漢字でも進んで辞書で引くようにすればいいのです。

「知っている」から「知らなかった」へ

私たちは日常生活において、知っているつ



付箋がたくさん貼られた漢字辞典

当協会では、平成22年6月26日(土)に京都市内で教員・保護者向けセミナー(後援:京都市教育委員会、毎日新聞社)を開催しました。京都大学大学院(教授で、文化審議会国語専門部会委員の阿辻哲次先生と中部大学准教授で、辞書引き学習法の実践家として知られる深谷圭助先生による講演内容をご紹介します。

付箋がたくさん貼られるにつれて辞書の厚みが増し、子どもたちは「私はこれだけの言葉を知っている!」という達成感を持つことができます(写真:次ページ)。

そもそも辞書といえは、知らない言葉を調べるためのものという印象が強いのではないのでしょうか。現在の学習指導要領では、国語辞典は小学校3年生ないし4年生から、漢字辞典は4年生から使うこととされています。しかし、基本的には辞書の引き方の指導が中心で、特に漢字辞典については、多くの人が小学校や中学校で学習した経験を思い出せないように、表面的で型通りにしか行われていないのが現状だと思えます。これでは、辞書はいつまでも遠い存在のままですし、子どもたちの言葉の関心は高まりません。

辞書引き学習法では、知らない言葉を調べるのももちろんのこと、すでに知っているつもり言葉もゲーム感覚でとにかくたくさん引いていきます。辞書引き学習法は、これまでの辞書指導のあり方を180度転換したものです。

もりの言葉を間違つて解釈して使っていることは少なくありません。また、少し意味のあやふやな言葉に出会うと、分かったふりをしてしまうこともあるでしょう。大人になると「今さら聞きにくい」と思うこともあるかもしれませんが、だからこそ辞書を手にとることが大事なのです。それを怠ると、気づかないうちに正しい日本語から離れていってしまうのです。

分らないことを知ることは、何も恥ずかしいことではなく、それこそ学問の第一歩です。子どもたちは先生や親から「言葉を正しく理解していない」と叱られてばかりいると、そのうちに分らないことを恥ずかしいことを感じるようになってしまいます。しかし、辞書引き学習法を実践する子どもたちは、「知っている」と思っていた言葉でも実は知らなかったのだ」という経験をたくさん積んでいきますから、知らないことを少しも恥ずかしくありません。それどころか、知らない言葉に出会うと「もっと知りたい」という探求意欲を高めるようになります。

辞書引き学習法の真価が問われるのは、子どもたちが大人になったころですが、ぜひ子どもたちには辞書引き学習法を通して、新しい言葉や意味との感動的な出会いを体験してもらいたいと思っています。そのためにも、子どもたちには、分からない言葉や気になった漢字に出会うたびに辞書を引き、体の一部と感ずるようになるまで自分の辞書を使い込んでほしいと思います。

ケータイ辞典

阿辻 哲次 先生

1951年大阪府生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。静岡大学助教授、京都産業大学助教授を経て、現在京都大学大学院教授。専門は漢字を中心とした中国文化史。国語審議会第22期委員として「表外漢字字体表」の作成に従事。現在は文化審議会国語専門部会委員として、常用漢字表の見直しに参加。著書に「漢字のはなし」(岩波書店)、「部首のはなし」(中央公論新社)等。

ある日の通勤電車の中で、向かいに並んで座っていた一人の女子高校生がさかんにおしゃべりしている。どうやら近いうちに定期テストがあるようで、たぶん現代国語の試験準備なのだろう、二人は漢字の書き取り問題についての予想を話しはじめた。

一人が「キンユウ政策」の「ユウ」って、どんな漢字だったか？」と友人に聞いた。すると、聞かれた側は即座に携帯電話を操作し、「ほら、この字だよ」と相手に画面を見せていた。

なるほど、と私は感心した。いまの日本語でよく使われる日常的なことはなら、携帯電話のメール機能で即座に漢字が表示される。これなら厚くて重い辞典を持ち運ぶ必要もないし、どこでも「辞書」を引くことができる。それは必ずしもいいことだとは思わないが、それにしても便利な時代になったとは思っ。

わずかでも時間があれば、携帯電話からメールを送る人が激増している。電車の中や、街頭で立ったまま、時には歩きながら、ほんとうに寸暇を惜しんでという感じで、毎日たくさんの方が小さな電話機から電子メールを送っている。

しかしそんな「電子の手紙」を頻繁にやりとりしている人も、かつて「筆まめ」と呼ばれた人々とはタイプが異なっているようだ。いや事実はむしろ逆で、これまで葉書や手紙を書くことほとんど無縁であった人が圧倒的に多いように見受けられる。

手紙だけでなく、学校での課題で出される作文や読書感想文などを避け続けてきた人たちが、いま片手に収まる電話機を使って、日本語の文章を書きまくっているのである。

これはいつたいていどういことなのだろうか？ もちろん流行のメディアを使っているという楽しさもあるだろう。要するに「かっこいい」し、「進んでいる」のだ。しかしそんな軽薄な事象以外に、文章を書く環境がぐっと簡便になったという点が背景にあることはまちがいない。携帯メールなら操作を比較的短時間でマスターできるし、いつでもどこでも気軽に書くことができる。

そこにはさらに、文字の美醜に神経を使う必要もない。ワープロやパソコンで作った文書の美しさを決めるのは、機械に内蔵される書体(フォント)とプリンターの性能であつて、文書を入力した人間の腕前ではな

い。ましてや携帯電話から発せられるメールは、プリントアウトされることすら想定していない。

それはメール受信者だけに向けられた個人的なメッセージであり、かつての手紙に見られた「時候の挨拶」とか「頭語と結語」のような、準拠すべき形式がまったく存在しない。「どうしてる？元氣？」とか、「明日のコンパ、何時からだっけ？」というような書き出しから始められる「手紙」を、電車の中や、注文したラーメンができるまでにチャットと書くことができる。こんな便利な道具が流行らないはずがないのである。

しかしそんな簡単さきまるメールであっても、やはり漢字を使うことだけは避けられない。いまの日本人にとって、日本語は



公家の漢字、僧侶の漢字

山本 真吾 先生

1961年大阪府生まれ。広島大学文学部国語学国文学専攻卒業、広島大学大学院文学研究科博士課程後期中退。博士(文学)。広島大学助手、三重大学専任講師、同助教授を経て、2005年より白百合女子大学教授(文学部国語国文学科)。専攻は、日本語史(古代中世の書記史、文体史)。著書に「平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究」(汲古書院、第25回新村出賞受賞)、「図解日本語」(三省堂、共著)等。

公家の漢字生活

日本人が漢字をさまざまに使いこなせるようになった、平安・鎌倉時代の漢字生活の一齣を紹介してみたいと思います。この時代には、「源氏物語」や「枕草子」といった女流文学作品が仮名で書かれましたが、当時の日本人が書いたものの中にあつてはむしろマインナーであり、一般に公の文書などを記録するのは、上代から引き続いて、専ら漢字のみを用いて綴る日本式の漢文(＝和化漢文)によつていました。

平安時代の貴族たちは、宮中での儀式や出来事をこの漢文で綴っており、公家日記として今日に伝わっています。藤原道長の「御堂関白記」や小野宮実資の「小右記」など有名で、平安時代の史料として欠かすことができません。これを解説するには、漢文の漢字一字一字がどのような日本語(＝訓)を表しているかが問題となります。

縦雖有所勞、相扶必可參入(＝縦ひ所勞有りとも雖も、相ひ扶けて必ず參入すべし、「小右記」寛弘二年七月十七日) 右の文の「縦」は、その下の「雖」と呼応して、副詞「たとひ」の訓を担っていると考えられます。古語「たとひ」とは、今日の日本語で「たとえわが身がどうなるうとも、助け出さなければ」などと使う副詞の「たとえ」でした。

これまで、平安鎌倉時代の副詞「たとひ」

の漢字表記は、この「縦」が担っており、当時の「常用漢字」であると考えられています。

ひとつの例外がきっかけとなり

私の卒業論文は、鎌倉時代に書かれた仏教儀礼(＝表白)の文献を対象として、漢字索引を作成し、ひとつひとつの漢字の訓読みを、古辞書などを用いて推定し、同訓異字の使い分けや日本化した漢字音の実態を調べたものでした。

設此身、徒雖捨西方、蓮う中ニ必彼魂ヲ可迎ハ給フ(＝設ひ此の身を徒に捨つとも雖も、西方の蓮の中ニ必ず彼の魂を迎へ給ふべし、日光輪王寺蔵「諸事表白」)

この古写本では、副詞「たとひ」に「縦」ではなく、「設」が用いられていることに気がきました。同訓異字は、しばしば「望む」と「臨む」のように、意味の上で使い分けがありますが、「縦」と「設」とには意味上の違いは見られません。ですが、そのときには、個人的な用い方なのだろうという程度にしかならず、深く気にもとめませんでした。

平安・鎌倉時代の漢字文献を広く調べるその後、あるとき、他の古い書物を読んでいた、次のような例が目に入りました。 設又仙人詞実なりとも、公は争でか

こらへ給ふべき、山口光田氏蔵「草案集」

この「設」も「ナリトモ」と呼応しており、「たとひ」を書き表した漢字だと分かります。卒業論文で書いた「設」のことがここで想起されました。「二度あることは」ではありませんが、一度しっかり調べてみようと思いつき、古文書を年代順に配列した『平安遺文』と『鎌倉遺文』(調査当時は未完)に収録されている、およそ3万五千通の文書について、副詞「たとひ」がどのような漢字を用いて書かれているかを調べました。

僧侶の実用漢字

設又雖為三百余町、当莊御封既百四十余石也(＝設ひ又百餘町為りとも雖も、当莊の御封は既に百四十余石なり、「平安遺文」二八八六 東大寺三綱陳状案、保元二年)

「縦」ほど多くはありませんが、「設」も200例ほど使われており、確かに副詞「たとひ」の表記として当時用いられる漢字であることが分かりました。「縦」が「常用漢字」だとしたら「設」は「実用漢字」とでも言えましょう。そして、何より顕著な違いは、公家の文章に見られた「縦」に対して、「設」は書き手がお坊さんの文書に偏るということでした。つまり、「設」は僧侶の実用漢字だったので。公家の漢字と僧侶のそれとは異なるケースのあることが分かりました。

漢字の使いざまから歴史を照射する

「百姓」はだれから漢字を学んだか、とはいえず、すべての文書が僧侶を書き手とするわけではなく、一割程度は僧侶以外の文書にも使われています。ところが、この例外の中にも興味深いことが見つかりました。僧侶以外の文書の、あるまとまった数のものは「百姓」の文書だったので。

当時の「百姓」は、一体、だれから漢字を学び、文書を綴ったのでしょうか。日本史学の分野では、おそらく在村の僧侶だっただろうと推測しています。ですが、「執筆僧」などと署名のある文書を除いて今日それを証明する手立てはありません。しかし、これら「百姓」の文書に、僧侶の実用漢字である「設」がしばしば用いられるという事実は、漢字の使いざまからこれを証明することができそうです。一見、例外として都合の悪そうな例も、見方を変えれば歴史の証明材料にもなるかもしれないのです。

ほかに、接続詞「これによりて(依之)」や「かくのごとし(如是)」なども公家と僧侶とでは用いる漢字に若干違いがあるようです。今はこのような事例がどれくらいあるのかを調べ、その違いが生じる要因(お経(＝漢訳仏典)の漢字の使い方が影響しているのではないかと見通しをもっています)についても追究してみたいと思っています。

※「諸事表白」および「草案集」の返り点と送りがない原文のままです。

本コーナーでは、各界で活躍されている方々に「自分を支える漢字一字」などをテーマに、それぞれの人生観・仕事観をお話いただきます。



株式会社堀場製作所 最高顧問
堀場 雅夫さん

1924年京都府生まれ。株式会社堀場製作所創業者。京都大学理学部在学中に堀場無線研究所を創業し、食品工場などで必需品のpHメーター開発に成功。学生ベンチャーの先駆けとなる。医学博士。現在、財団法人 日本漢字能力検定協会の理事を務める。

ベンチャー魂を支える「自今生涯」の精神

大学2年生の時、日本は終戦を迎えました。私は研究者を志望していましたが、専門の原子核物理学の研究が禁止されてしまったため、自力で堀場無線研究所を立ち上げました。そして、この研究所で卒論を書き、大学を卒業しました。その後、エレクトロニクス関係で生計を立てながら、「始めたからにはとことんやろう」と、1953年に堀場無線研究所を株式会社化し、社名を堀場製作所に改めました。

そんな私の座右の銘は「自今生涯」です。この言葉には「今のあなたがいるのは、その命が先祖代々、脈々と受け継がれてきたおかげであり、そのことを忘れてはいけません。また未来は1秒先も見えないのだから、すばらしい未来のためには今この瞬間を精一杯生きなさい」という意味が込められています。私自身のことを振り返ると、まさに「自今生涯」の人生を歩んできたと思います。

私の好きな漢字一字——「雅」

私の好きな漢字一字は、私の名前にも含まれている「雅」です。言葉の響きも、漢字のつくりも気に入っています。この漢字を見るだけで、少し贅沢な気持ちになりませんか？

韓国が1970年に漢字教育を一時廃止し、ハングルのみを使うようになった時、私は文字が変わることは、同時に文化が変わることでもあることを実感しました。新聞も、教科書も、町の看板も、すべてハングル表記に変わってしまったのですから。

私たちは、普段何気なく漢字を使っていますが、漢字は日本文化のベースでもあります。今一度、きちんと漢字に向き合ってみたいものです。



フルート奏者
園城 三花さん

1963年京都府生まれ。8歳でフルートを始める。1978年にアトモルト北西ドイツ音楽大学の青少年特別クラスに入学。ミュンヘン音楽大学大学院卒業後、パリでバロック音楽を学ぶ。現在、日本各地でリサイタルやオーケストラとの共演を行う。

組曲『アルルの女』との出会い

私がフルート奏者としての人生を歩み始めたのは、フランスの作曲家ジョルジュ・ビゼーの組曲『アルルの女』との出会いがきっかけでした。メロディーを奏でるフルートの音色を聴いて、私はあたかも自分が自由に空を飛んでいけるような気分になりました。それからというもの、私は何度も何度も繰り返しレコードを聴き、「ぜひフルートを吹いてみたい」と強く願うようになりました。そんな私を見かねた母がフルートを習わせてくれたのです。

名著との出会い

15歳の時にドイツに単身で留学しましたが、母は留学中に、古典の『源氏物語』をはじめ、夏目漱石や谷崎潤一郎らの名著と呼ばれるものをたくさん送ってくれました。母は「異国にいても、日本語を大切にしてほしい」と願っていたようです。私も日本のことを強く想っていましたので、母に感謝するとともに、送られてきた本を夢中で読みふけりました。

私の目標を表す漢字一字——「貫」

私の目標を表す漢字一字は「貫」です。現代は、さまざまなことが瞬時にかつ容易にできてしまい、ひとつのことをじっくり時間をかけて取り組むことが難しい時代です。このような時代にこそ、本当に成し遂げたいことを「貫」く姿勢が大切だと考えています。

一昨年、私は「三つの花希望プロジェクト」というNPO法人を立ち上げました。そこでは、自分自身がアトピー性皮膚炎で苦しんだ経験から、同じ病に悩む患者さんを中心に、地域の方々を対象としたコンサート活動や講演活動などを行っています。信念を「貫」くことで、自分だけでなく周囲の人も幸せにできたいと思います。私は、これからも音楽の道を「貫」いていきたいと思っています。



奈良県立万葉文化館長
中西 進さん

1929年東京都生まれ。東京大学文学部卒業。同大学大学院人文科学研究科博士課程修了。文学博士。筑波大学教授、国際日本文化研究センター教授、大阪女子大学学長、京都市立芸術大学学長などを歴任。現在、社団法人 平城遷都1300年記念事業協会理事を務める。

万葉人に学ぶ——「いのち」と「ころ」

日本に現存する最古の和歌集である『万葉集』には、皇室や貴族だけでなく、名もない庶民らの歌も数多く収められています。歌集全体の表情が豊かで、人々の本音が垣間見られるところに惹かれ、私は日本文化の研究を始めました。

2003年には、全国の小・中学生を対象に古代の心の豊かさを伝える「万葉みらい塾」を始めました。子どもたちには、「いのち」のエネルギーが生み出す『万葉集』の愛の歌を通じて、「いのち」を燃やしながらいかに精一杯生きることの大切さを学んでほしいと思っています。

状況に応じて言葉を使い分ける日本人

日本人の言語活動を見ますと、古来より日本で使われてきた大和言葉は、恋のこぼれをささやく時のように「ころ」の動きを表す時に使われ、漢字や外来語は正確に物事を伝える時によく使われています。様々な言語を受け入れ、状況に応じて言葉を使い分けているのです。日本人は本当に素晴らしいなと思います。

学者として大切にしたい漢字一字——「優」

私が大切にしたい漢字一字は「優」です。昔の有名な中国の儒学者である朱子が「優游涵泳」であることが学者としての必須条件だと言っていました。「優游」とはゆったりと遊べということです。わたしは学者ですから、なるほどと思ひ、ゆったりと遊びも交えながら(=優游)じっくりと学問に取り組む姿勢(=涵泳)を大切にしようと思っています。

●本コーナーは、毎週日曜9:45～10:00にラジオ関西で放送している「池坊保子の一言一句」の内容をまとめたものです。
(堀場さん：6月19日収録、7月4日・11日放送、園城さん：6月19日収録、8月1日・8日放送、中西さん：7月31日収録、8月29日・9月5日放送)